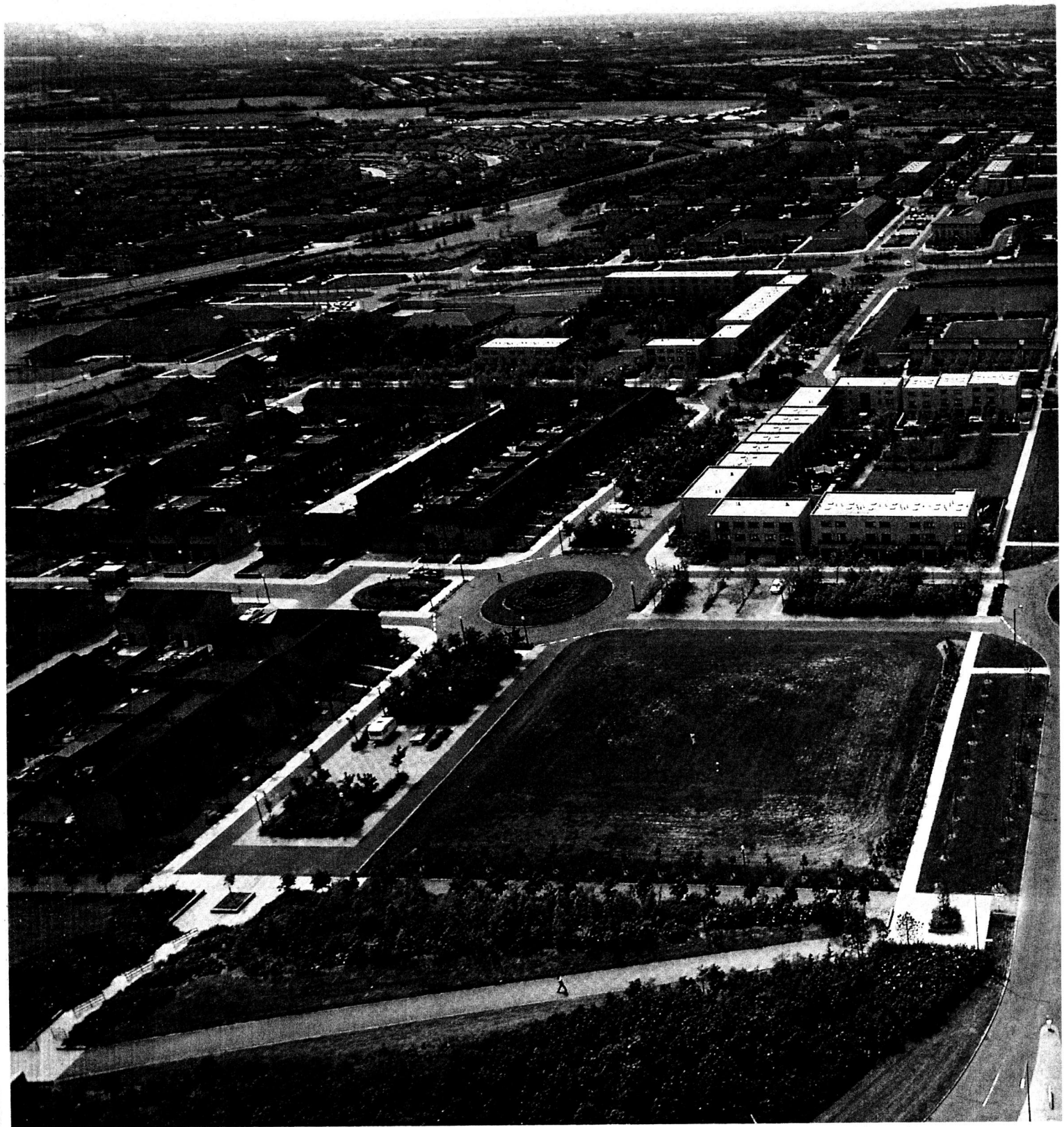
Special Report:

MILTON KEYNES:

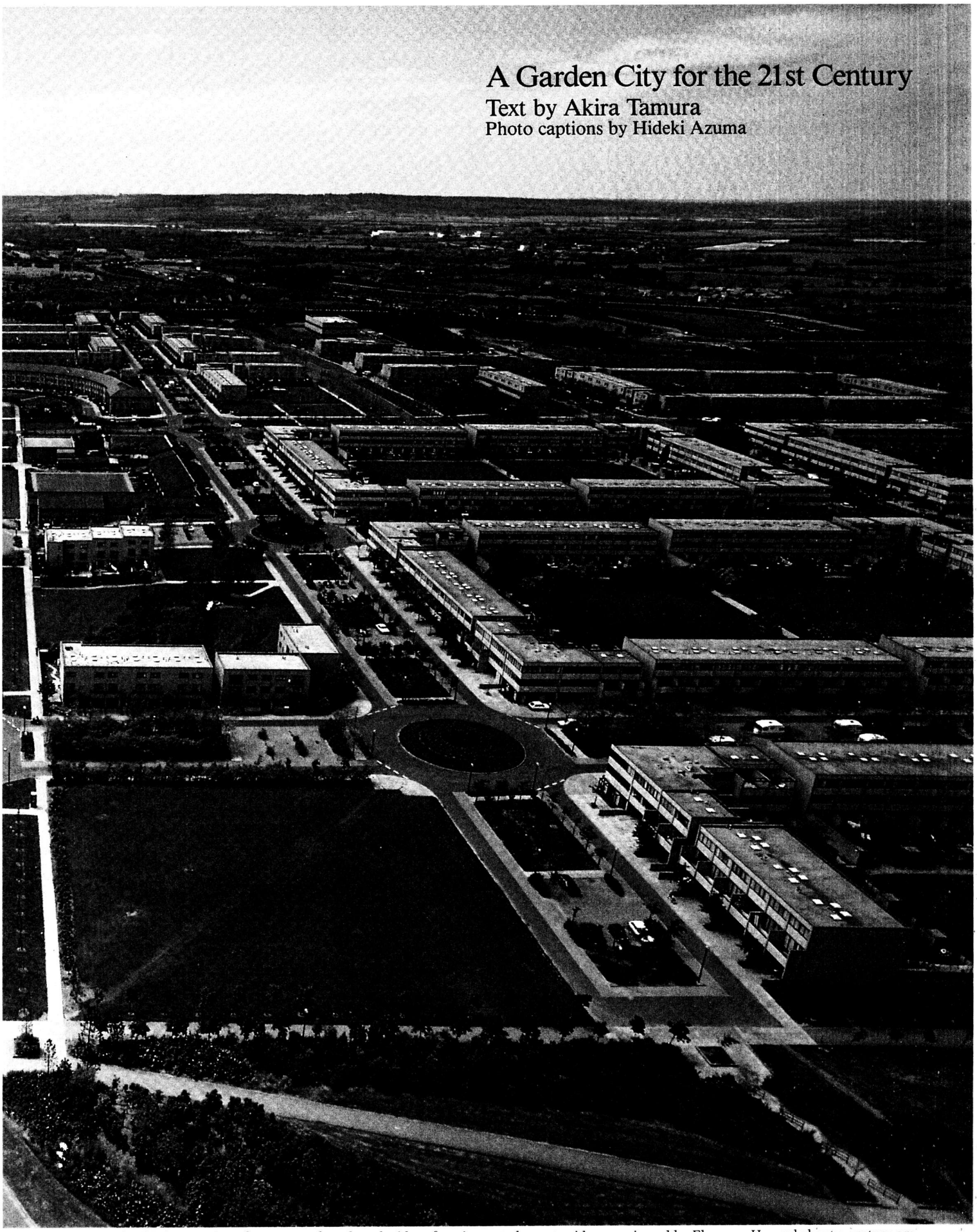
特集：新しい田園都市——英国のミルトン・キーンズ



田園都市が提唱されたのは，今から一世紀近く前のイギリスのこと．その方針を継ぐミルトン・キーンズを眺望すると，我々日本人は将来どのような都市をもてるのだろうか，と考えさせられる．

A Garden City for the 21st Century

Text by Akira Tamura
Photo captions by Hideki Azuma



Milton Keynes is the third generation of new towns based on the idea of a rejuvenated countryside as envisaged by Ebenezer Howard about a century ago.

ミルトン・キーンズにニュータウンを考える

文＝田村 明

写真解説＝東 秀紀

ニュータウンと田園都市

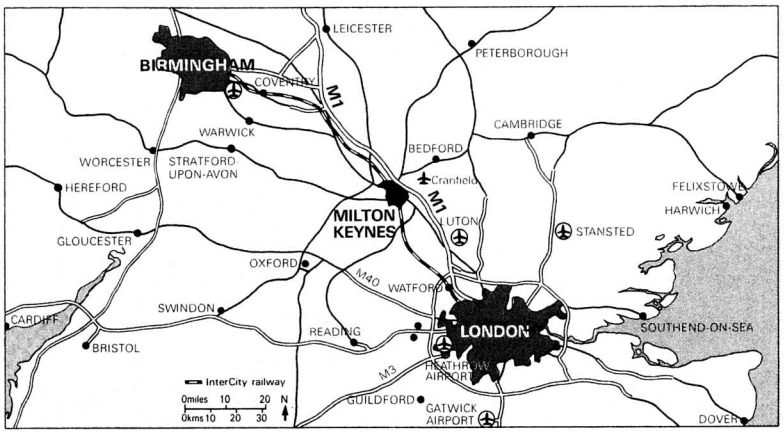
日本ではニュータウンという言葉が好きである．「千里ニュータウン」「高蔵寺ニュータウン」に始まる大規模なものだけではない．ちょっとした団地や不動産屋の広告にもニュータウンという言葉が使われている．

ニュータウンの本家はもちろんイギリスだが，日本では平気で本来のものとは違う意味に使っている．ただ新しい町という意味なら古くから使われていたが，現代のニュータウンは20世紀になってからの新しいコンセプトである．田園地帯に職場と住宅を併存させ，独立性ある都市を新たに造り，大都市への過度集中と膨張を防ぎ，過密による都市環境の悪化に代る人間らしい環境を造ろうというものである．

ところが日本のニュータウンは，巨大なベッドタウンにすぎない．都市の過大化や膨張を阻止するどころか，逆に大都市の近郊を拡大させスプロールを助長させた．本家のニュータウンとはちょうど反対の役割を果たしている．

イギリスのニュータウンの原点はエベネーザー・ハワードである．20世紀に入る直前の1898(明治31)年に『明日――真の改革へ至る平和な道』を発表し，次いで僅かな改訂により『明日の田園都市(Garden City of Tomorrow)』を1902(明治35)年に著した．実践家であったハワードはロンドンの北66キロメートルのレッチワースに株式会社による新しい町を造った．田園都市という言葉自体はそれ以前から存在し，シカゴも自ら田園都市と称していた．しかしハワードによって田園都市は20世紀の都市づくりの新たな理念と方法として定着し，それがニュータウンへつながった．

日本でも早くも1907(明治40)年に内務省地方局有志によって，このような考え方が積極的に紹介されている．大正年間には渋沢栄一により「田園都市株式会社」が設立された．最近になっても大平首相による「田園都市国家構想」が発表された．ハワードの田園都市とは相違があるが，日本人の深層心理の中にも田園願望が秘められているのかもしれない．それにしてはコンクリートジャングルと化した都市づくりを平気で行なってきたことも解せない．最近にわかに緑や，アメニティ，うるおいある街が叫ばれているのも深層心理の現れかもしれない．国際収支の黒字や，一人あたりＧＮＰでは真の豊かさは測れない．真に豊かな生活の基盤として都市づくりに理想をもち，実現の方法をもつべきだろう．それにはまだまだ多くの国に学んでゆかなくてはならない．ニュータウンについても考えることは多いはずである．



ミルトン・キーンズは，ロンドンの北西80km，バーミンガムの南東105kmの，高速道路(M1)沿いの田園地帯にあり，オックスフォード，ケンブリッジの大学都市やルートン国際空港にも近い．

Milton Keynes is located alongside the M1 motorway in North Buckinghamshire, about 80 km from London, halfway to Birmingham. It is connected with good rail service and near Luton international airport.

第三世代ニュータウン――ミルトン・キーンズ

イギリスのニュータウンは，正式には1946年のNew Town Actに始まる．それ以来今日まで32のニュータウンが生まれた．これらは３つの世代に分れる．第一世代はハワードの考えをそのまま生かし，大都市集中抑制のため，独立した小規模の都市を造ることであった．スティブネージやハーロウがその例である．しかし現実には小規模すぎて十分大都市抑制も果たせないなどの問題もあり，1960年ごろから第二世代に入る．地域の経済開発なども考えたものが生まれた．

そして第三世代は1967～1970年に始められる．これまでのものに比べると人口規模も大きく，多くは既存都市の拡張である．だからニューシティとよばれている．

ミルトン・キーンズは第三世代ニュータウンの代表的なものである．ロンドンとバーミンガムの中間にあり，イングランドの中で最も重要な高速１号線(Ｍ１)に沿っている．ロンドンからは80キロメートル，１時間ほどで到着できる．バーミンガムへも105キロメートル，オックスフォードやケンブリッジにも近い．日本の首都圏に比べると，東京から直線100～90キロメートルに沼津，甲府，高崎，宇都宮，水戸があるが，そのあたりと考えてよい．

1962年に地域が選定され，1967年に20世紀末までに将来人口25万人の計画が公式に定められた．現在はちょうど半分ほどのプロセスで，人口も12万人程度に達している．面積は8,863ヘクタールという広大なもので，人口密度はヘクタール28人程度，日本の多くのニュータウンに比べて４分の１以下の伸びやかなものになっている．ここにブレッチリーなど３つの町と13の小さな村落があり，４万人余りの居住者があったが20万人ほど増加させようというものである．

Milton Keynesという名称がおもしろい．Miltonは「失楽園」や「復楽園」を書いたイギリス最大の詩人の名だし，Keynesは著名な近代経済学者の名である．この不思議な名前はすぐ覚えられるが，古い地図ではなかなか見つからない．それもそのはず，これは13の小さい村落の中の

ひとつの名前なのである．日本ならこうした場合，大きな３つの町の名前のどれかがつけられるだろう．あるいは個性のない地方名を入れた「○○ニュータウン」という漠然たる名前がつけられてしまう．小さな一村落の名前を全体の名称にすることはまずありえない．Miltonといえば「楽園」や「エデンの園」といった田園への復帰とあこがれをイメージさせ，Keynesといえば，経済を見えざる神の手のままに放置せず，チエをしぼって公共的な経済政策を行なうイメージがある．「田園への理想」と「人為的なチエと努力」とを組合せた名称に，このニュータウンを意図する基本が感ぜられるのである．

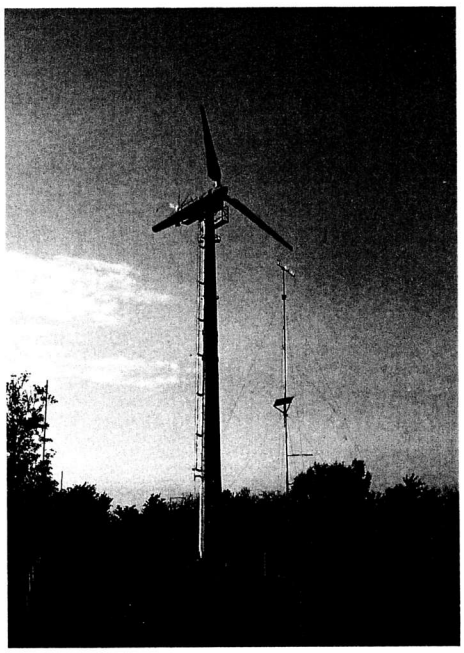
計画は，次の６つが目標とされている．

(1) 選択の自由 (2) 容易な移動(モビリティ)
(3) 調和と多様性 (4) 魅力 (5) 公共の参加
(6) 効率的で想像力に富んだ資源活用

そのために従来のニュータウンのような閉鎖系の道路パターンでなく，１キロメートルの格子型パターンになっていることが注目される．格子状といえば，ギリシャのプリエネやミレトス，中国の長安，我が国の平城京，平安京など珍しいことではない．だが，今ごろになって一見単純な格子型パターンをとったのは，自動車交通量の分散が可能で，あらゆる方向への発展が可能であること，各ブロックごとに多様で自由な計画が可能で，これをモザイク的に組上げることができるからである．もちろん格子状といっても古典的な直線ではなく，自然にゆるくカーブしているし，格子によって囲まれたブロックも大きくまとまりが可能である．

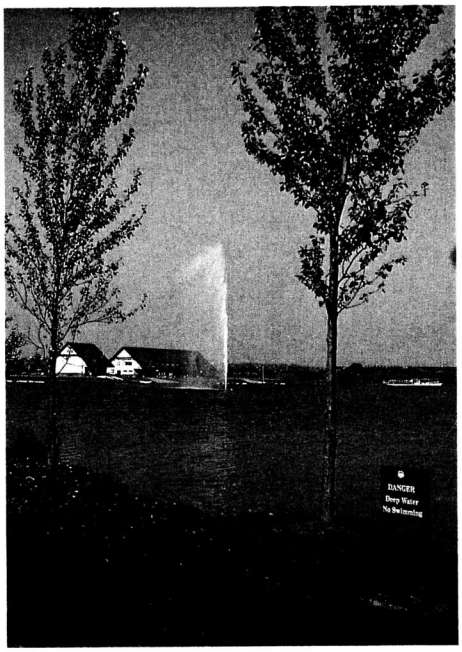
ミルトン・キーンズはイングランド特有のゆるやかな丘にある．建物は２～３階，せいぜい４～５階までで，目立つ建物といえば，巨大なショッピングセンターなどのセンター施設，ピラミッド型の多目的スポーツ施設であるレジャーセンター，フレームだけがピラミッド型の映画館などを含む娯楽センターぐらいのものである．これらの建物の高さはそう高いものではなく，町全体がきわめて平面的で田園的である．職場も一か所集中をさけて全体に広く分散されており，なかには牧場があったり古いミルトン・キーンズの小集落がそのままの形で田園の中に残されている．水上スキーまでできる広大な人工湖が造られ，町を運河が突き抜ける．家の前からボートに乗って船旅を愉しめる家もある．

1970年以来すでに2,000以上の会社が来ており，米国のセントリー生命保険や，多国籍企業として著名なアウディ－フォルクスワーゲン，コカコーラ，メルセデスベンツ，モンサントなどもここに英国本社を設置している．日本企業もすでに10数社進出し，全寮制の暁星国際学園も開設された．



エネルギーパークの風力発電装置．ここでは7年計画で，種々の省エネルギーシステムの実験が行なわれている．

Wind power equipment in Milton Keynes Energy Park is part of a 7-year experimental project.



大きな公園の中に造られたウィレン湖には，マリーナやレストハウスが整備され，水上スキー，カヌー，ヨットが楽しめる．

Man-made Willen Lake offers water-sports such as sailing, canoeing and water-skiing.

ミルトン・キーンズを考える

それではミルトン・キーンズは，いったい何だったのかを考えてみたい．第一はニュータウンからニューシティというように，20万人以上というこれまでにない大きな都市を造ろうとしていることである．イギリス人はホームという言葉を独特のものとしてもち，またシティ・プランニングやアーバン・プランニングといわずタウン・プランニングというぐらいに，家庭や小さな家のまとまりとしてのタウンを尊重する．ハワードの思想もここにあり，人口３万人ぐらいが適当とされてきた．せいぜい５～６万人どまりという第一世代ニュータウンとは明らかに違っている．田園はあっても都市的魅力が少ないというこれまでのニュータウンに対して，ミルトン・キーンズでは，巨大なショッピングセンター，多数の映画館，レジャーセンターもそなえ，都市的中心性や魅力も造りだそうとしている．

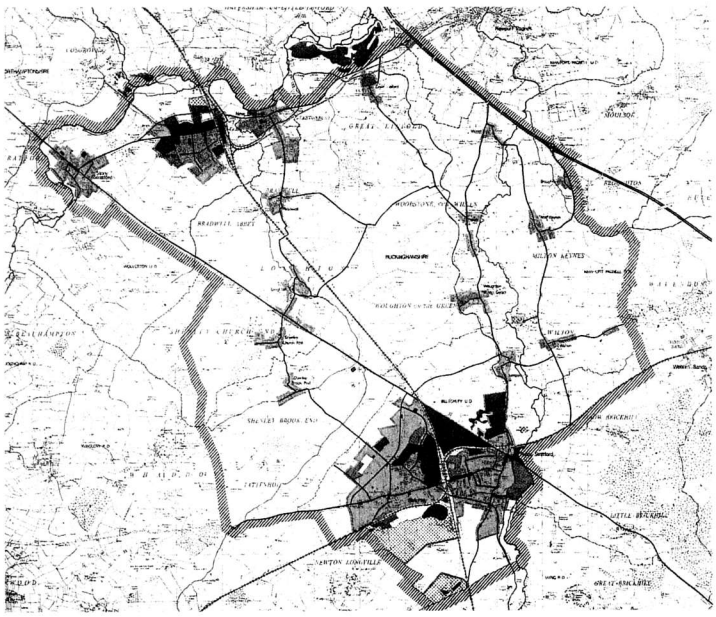
このような考え方は実はすでにハワードに示されている．ひとつひとつの田園都市は人口３万人ぐらいでも，田園で区切られた都市が高速鉄道で僅か数分で結びつく．各都市の中心に別に人口５万８千人の中心都市をつくり，公共建築物，大学，図書館，映画館，劇場などを置けばよい．こうした美しい都市群の人口は全体で20～30万人になるだろう．ハワードの究極の目的は，決してひとつの小さな田園都市だけを造ることではなかった．

ミルトン・キーンズは，ハワードの都市群を格子状に圧縮したと考えられないだろうか．ひとつひとつのブロックはハワードの田園都市よりさらに小さくまとまりがある．その中に住宅，職場，小さなセンター，小さな田園もある．それが集まって中心都市としてのセンターをつくっている．人口25万人や格子パターンは一見ハワードから遠く離れたようで，実は内容的にはハワードの都市群である．違うのは高速鉄道に対し自動車時代に対応するように置きかえられたものと見てもよい．

第二は計画に弾力性をもたせている点である．イギリスはまだ柔軟な方だが，一般にヨーロッパ型の計画は固定的で，決められた目標に着実に進むというものであった．しかし長い時間をかけるニュータウンは，計画，建設，実用のそ

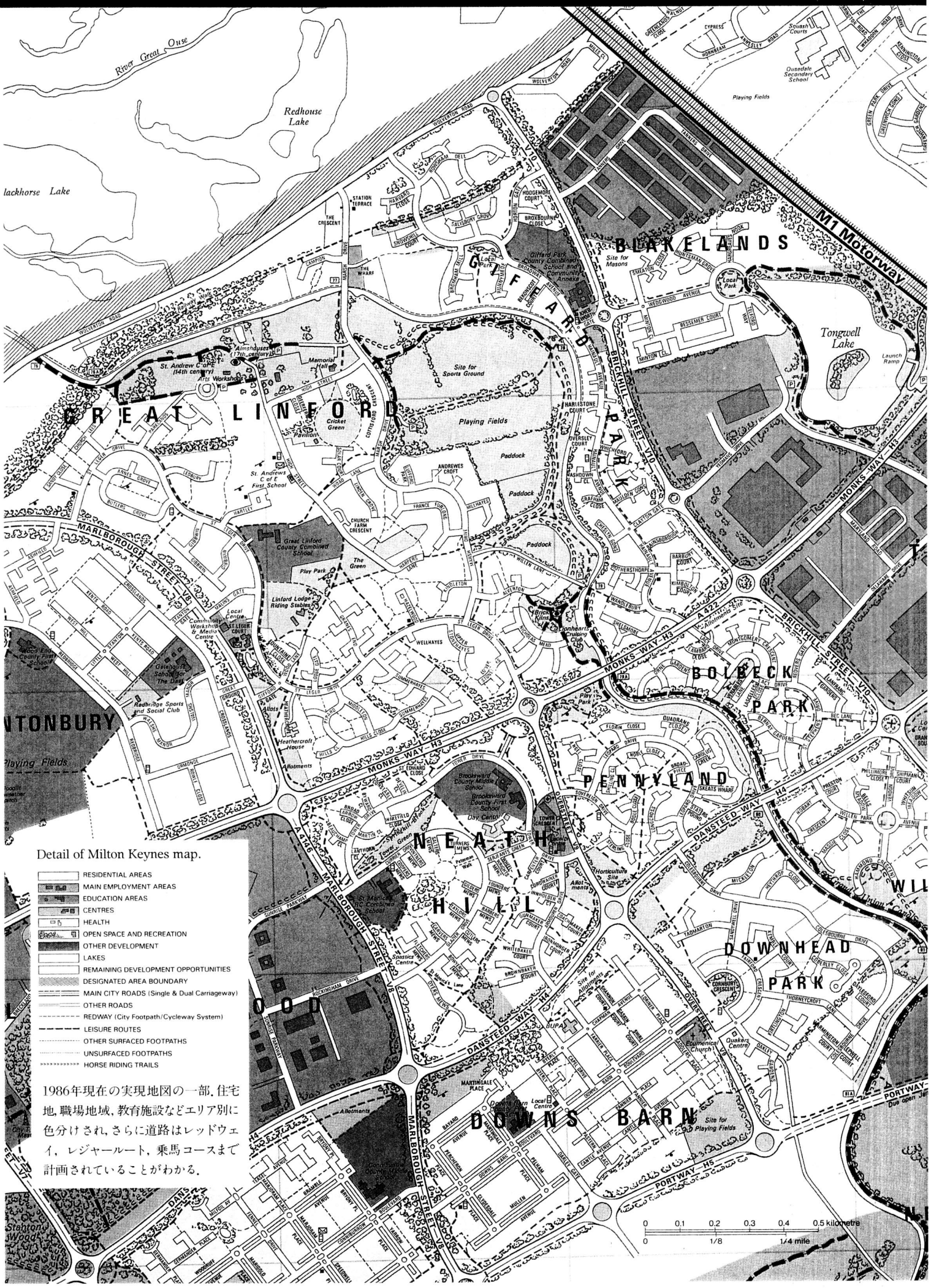
'HE STRATEGIC PLAN

'HE DESIGNATED AREA AS EXISTING AT APRIL 1969



1969年の地図に示された指定地域(左)と最終的目標を表わす計画図(上).
1キロメートルの格子型パターンは，既存の町や村を，その雰囲気を損うことなく，巨大な網の中に取り込むよう計画され，また交通量の分散，計画の発展性や，特に弾力性を可能にしている．当初のプランでは，各グリッド内の土地利用は固定的には考えず，プロジェクト進行に伴い多様で自由なデザインを決めていくシステムをとっている．
Milton Keynes' grid-road network as seen in the strategic plan (above) incorporates pre-existing elements of old villages and towns (left) into the structure without drastic change. The plan's objective was to provide flexibility for expansion or change through regular monitoring and evaluation while keeping intact the basic "New City" concept.

- Area of existing development at April 1969
- Residential area
- Employment sites
- Centres
- Local centres
- Health campus including district general hospital
- Health centres
- First schools
- Middle schools
- Secondary schools
- Open University
- Higher education centre
- Further education colleges
- Open space
- Golf courses
- Rivers, lakes and canal
- Balancing reservoirs
- Sewage disposal works
- Reserve sites
- Brickfields
- Woods and parkland outside the designated area
- Local roads
- Main roads
- Motorways
- Railway
- Designated area boundary



1986年現在の実現地図の一部．住宅地，職場地域，教育施設などエリア別に色分けされ，さらに道路はレッドウェイ，レジャールート，乗馬コースまで計画されていることがわかる．

れぞれの時点での状況変化が生じてくるのは当然である.

そこで，ミルトン・キーンズでは既存の都市や集落を含めて，まず全体に格子状道路の網をかけてしまった．これで都市の基盤と構造を確保し，一方ひとつひとつのブロック内は固定的に考えないで，建設期間中ずっと内容を検討しつづける．きちんとした監視や評価を行ないながら計画に自由度をもたせ，民間企業も大いに活用して開発をさせている．このような弾力性や選択の多様性を可能にするため，粗いメッシュの道路パターンの網がかけられたのである.

計画の自由度と設計の自由とは違う．各デベロッパーが計画を進めるには，地区ごとの設計のガイドラインがあり，建築担当官と打合せ，地域にあった設計をするための強い指導がある.

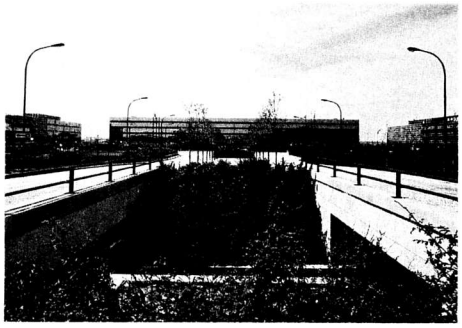
日本の場合，田園の中にいきなり各方面に開けているグリッドパターンができたとき，日本の都市ならまちがいなく計画地外に激しいスプロールがおき，隣接地の地価急上昇をみるだろう.

イギリスでは勝手な開発もできないし，周辺土地で投機的にかせぐこともできない．日本が手本にすべきことはグリッドパターンではなく，実はその前提にある土地や都市開発を国民全体のために行なってゆく思想と，それを可能にする土地や開発のルールなのである．基本的な土地政策がないところで形式だけを学んではならない.

第三は，何といっても田園・都市であることである．高い建物をつくっていないし，自然の地形も生かされ，大きな湖水も造られ，牧場もある．人間は田園に休むべきだという一貫した考え方が最大限に生かされている．古いミルトン・キーンズの集落までそのままある．私が行ったころ，まだ建設の初めのころであったが，自然の中を歩く手引きとしてトレイルの本をいくつか売っていた．その土地にある動物も植物も，このトレイルによってよく知り，いっそう大切にするだろう．自然との親しみを増すことが生活の中心におかれている.

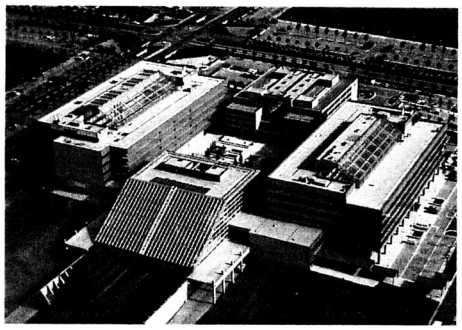
別な見方からすれば，とりたてて何もない．あるがままの自然を大切にするということである．イギリス人は田園を大切にするが，かつてペリーが初めて鎖国日本に来たとき，「日本の田園はイギリスより美しい」と言った．いま我々は本当に自然や田園を大切にしているのだろうか.

これまで見てきた第一と第三の点は田園都市の考えの中にすでに存していた．第二の弾力性の点も，ハワードは小さな田園都市を次々と造りつなげてゆくことを考えており，マクロな弾力的計画を考えていた．そうしてみると第三世代といい，前とは変わったというミルトン・キーンズも実に田園都市の伝統を現代の状況の中で生かしていると見ることができる.



ミルトン・キーンズ駅は，ロンドン―グラスゴー間を走る特急列車の停車駅で，1982年に開設，センター地区にある.

Railway station, opened in the city centre in 1982, offers frequent service to London, Birmingham.



セントラル・ビジネス・エクスチェンジには，オフィスやホテルがあり，各企業やビジネスマンの交流も意図されている.

The Central Business Exchange combines office, retail, leisure and hotel facilities within a single complex.

知的情報発信基地として，オープン・ユニバーシティ（放送大学）は，イギリス中の人々に，学習の機会を提供している.

Since its start in 1971, the Open University at Walton Hall has made Milton Keynes a city of learning.

ミルトン・キーンズでは省エネルギー化が図られている．125ヘクタールのエネルギーパークもある．多くはパッシブ・ソーラー方式で，そう金もかけずメンテナンスもかんたんで自然に太陽エネルギーをうまく利用するのである．化石燃料を少しでも減らすことは，エネルギー対策だけでなく，排ガスを減らし，環境的にも好ましい．これも自然の中で自然と共に，自然を生かしながら生活する田園都市の未来版ではないだろうか.

ここでは，また，産業革命以来のハードな労働力に頼っていたものから，より新しい情報化時代に対応しようとする．情報のコミュニケーションの増加や新しい想像力をかきたてて新しいチエを創造する．オープン・ユニバーシティなどの生涯学習的大学も開かれている．今までのハードな工業都市は，情報化時代によりソフトなチエを生みだす都市になる．それは従来の巨大都市だけでなく，新しい中都市でも可能だとする未来への実験であろう．田園の中の情報都市，田園情報都市が成り立つかに注目したい.

もちろん，ミルトン・キーンズは田園的ではあっても人為的に新しい都市を造る．そのため都市的中心性や都市の魅力を具える積極的な努力がなされている．しかし既存の都市のような求心性の強い狭隘高密なものではなく，いわば都市的魅力のエッセンスだけを取り込み，猥雑なものを避けようとしている．都市は不断に新しいものを生みだす場である．説明できない不思議さや想像をかきたてる何かが必要である．この町がそうした創造性ある魅力を具えるかは疑問もある．ただロンドンやバーミンガムという大都市に近く，在来型の都市魅力はそれらを利用すればよいと割り切ればすむことかもしれない.

いずれにしてもこの高層ビルひとつない田園的な都市に，世界企業の英国本社が多数立地している．それはただ人が沢山住むベッドタウンではなく，新しい町，新しい情報を発信する知的創造の町を目ざしている．最近わが国でもさまざまな名称の都市づくりの考えが花火のように打上げられたが，多くは一過性である．東京集中を抑制する情報中枢をもつニュータウンが生まれてもいいはずである．老大国といわれるイギリスでは，そうした未来への実験が静かなイングランドの田園地帯で進行しているのである.

ミルトン・キーンズの冒険

ミルトン・キーンズは，イギリスの最も新しく，最も大規模で，そして最も野心的なニュータウンである．その歴史は，1967年，イギリス政府が，ロンドンの過密抑制のため，ロンドンからバーミンガムに向かって北西80kmの，8,863haに及ぶ田園地帯（既存人口4万）に，人口25万のニュータウン建設を決定したことから始まる．当初のプランは，ルウェリン＝デイビス教授（ロンドン大）らによって作成され，2000年の完成が目ざされた．そこでは，情報化社会におけるライフスタイルとして，人々は田園に住みながら，知識集約的労働に携わり，自然に親しみつつ，都会と同様に楽しんだり，学んだりできるような環境づくりが提案された．以後，石油ショックと経済不況により，目標人口は20万に縮小されたが，開発公社の手で，プロジェクトは概ね順調に進行している．現在，人口は12万5,000，プロジェクトはちょうど半ばに達したところである．

The Experiment and Challenge of Milton Keynes

Milton Keynes is the United Kingdom's latest and one of its largest new towns. Its history goes back to 1967 when the government, facing population pressures in London, decided to establish a community of 250,000 people, halfway between London and Birmingham, in an area covering 8,863 hectares and embracing the towns of Bletchley, Wolverton and Stony Stratford.

Owing to the economic recession and oil crisis, the target population later was reduced to 200,000, and has grown rapidly already.

The master plan, created by a team including Richard Llewelyn-Davies in 1970, calls for the new city to reach maturity by the year 2000.

Milton Keynes could be the prototype of a new urban lifestyle, suited to a more information-oriented workforce. Residents would be able to live in the countryside and yet enjoy the same opportunities for education and leisure as city-dwellers, plus the advantages of a suburban environment.

Tower Crescent, Neath Hill